三日月の国のアリス

歌姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
三日月の国のアリス

【Ｎコード】
Ｎ１８４３Ｆ

【作者名】
歌姫

【あらすじ】
ごくごく普通のさえないガリ勉少女の密かな願い、それは『おとぎの国』に行くこと。そんなことばっかり考えて三日月を眺めていたら・・・！！ここはどこ？誰もが憧れる『おとぎの国』と現代日本の狭間で自らの存在をかけた二人の魂の戦いが今、始まる・・・

前奏曲

暑い。
今夜八十三回目の寝返りを打つ。あぁあ～どうしよ、明日テストなのに・・・。
眠くて問題間違えるとか情けなさ過ぎるし。
でも眠ろうとすればするほど頭は冴えていく。
しょうがない、腹をくくってそっと布団を出て、バルコニーへ足を踏み出す。
ただいま深夜二時。夏の夜風が、気持ち良い・・・

私、山崎恵美。１６歳。私立の有名女学校に通っている。中学校からのエスカレーターで、有名大学にたくさん人を送り込む、いわゆる進学校。
それだけに、高校になってからはみんなテスト期間となると、ちょっと話しかけるのもためらわれるようなぴりぴりした雰囲気で勉強をしている。
馬鹿みたい。
せっかくの青春、がりがり勉強ばっかしてつぶしちゃうなんて。

・・・そう思いつつも誰よりも勉強して成績優秀なのはこの私。
平均に近い点を取っただけで鬼のように怒る両親が怖くて、必死に必死に満点を取ってきた。
本当に心を許せる友達もいなくって。
一人で勉強机に向かう日々・・・。
あああ～馬鹿みたい。
ふっと自嘲気味に笑うと綺麗な三日月が目に入った。
儚げだけど、煌々と輝くこの細い月が私は大好き。

満月みたいに豪華じゃないけど、新月みたいに冷たくもなくって。
自分に嘘をついて、がりがりとペンを走らせる私をそっと見守っていてくれる気がして。

このまま『おとぎの国』に行けたらいいのに・・・。
身長１７０ｃｍで、さえない眼鏡顔の私がこんなこと思ってるなんてだれも考えないと思うけど、常々私が願っていることは『おとぎの国』に行くこと。
我ながらアホくさいと思うんだけど、
私はこの世界から逃げ出したかった。

もう一度三日月に眼をやると、月はきらっと輝いて・・・

私の足元が消えた。

穴の中

あれからどのくらい落ちたんだろう・・・。
家のバルコニーの底がいきなり貫けて、私は地面にたたきつけられるはずだったのに。
上を見上げても下を見てもただの闇。だんだん意識がはっきりしてくるにつれて、私はあることに気づいた。
まるで・・・アリスみたい。
そこに思い至った瞬間、すべてがわかった気がした。そうか、これは夢なんだ。
ずっと、ずっと『おとぎの国』のヒロインになりたいなんて思ってたら、夢になっちゃったんだ。
そうか、夢だ。
そういえばいつの間にか私の服も、ださいス〇ーピーのパジャマからピンクのエプロンドレスに変わってて、髪はきれいに梳かされてピンクのリボンがついている。
嫌でたまらなかった牛乳瓶の底みたいな眼鏡もなくなってる。
いい夢だ。
夢なら・・・醒めなきゃいいのに。
ずっと闇の中でもいいから、もうあんな空間に行きたくない。
成績優秀のいい子ちゃん。
つまらない話、自慢話にも耳を傾けてくれる便利な友達。
ずっとそういう自分でいたから。
もう自分でいるのが嫌になっちゃったんだ・・・。

ふと下を見ると光が見えてきた。
あぁあ～この素敵な夢もこれで終わりか・・・
テストやだなぁ・・・・

・・・プロフィール・・・
山崎恵美（♀）
５月１７日生まれ。
１６歳（高校一年）
私立の有名女学校に通う。
身長１７１ｃｍ
体重？？
血液型Ａ型
大きな丸眼鏡に、セミロングの漆黒の髪。色白。
眼はこげ茶色。現代日本の中流上階級くらいの家で育つ。

真昼の三日月

私は今、森の中にいる。
いや、別に夢から醒めて現実逃避したくてっ・・・というわけではなく。
光の中に吸い込まれてからふと気づいたら、知らない森の中に一人で突っ立ってたのね。
あれからほっぺたをつねったり叩いたりしてみたけど、私はどうもしっかり覚醒してるみたい。
しかも、例のピンクのエプロンドレス&リボン着用中。
どっからどう見ても怪しい人物だと思う。
まぁ、そんなことはとりあえずどうでもよくって。
問題なのは・・・

ここどこだ。

そうここどこだ。

私が立っていたのは野草がいい感じに生えていて、ちょうど周りを木に囲まれていてっていう
場所だった。そう、いかにも人が手入れしてますっていう感じの。
風は爽やかで、気温もちょうどいい。
が、ここの自然は何かが変だ。
皆さん、青空に浮かぶ三日月なんて見たこと・・・ないですよね??
絶対におかしい。
科学的に考えてありえない!!!
私が今まで勉強してきた理科はどうなったんだ〜!!!
って感じなんですけど（苦笑）

ということで私は目覚めてからずっと三日月とにらめっこして悶々と悩んでいる。

「ふ～やっと見つけましたよ、アリス」

ぎょっとして振り向くと。

もうおわかりだと思う、そこにいたのはうさ耳を生やした青年だった。

さらさらした綺麗な漆黒の短髪から伸びる二本の純白のうさ耳。
ワインレッドのような深い、紅の瞳。
それを縁取る異常に長いまつげ。

つまり一言でいうと見てるだけで息の詰まるような美青年がいたわけだ。

「しろ・・・うさぎ??」
「ああ、やっぱりあなたはアリスなんですね!!そう、僕は白兎のシルヴァ・コンディクトです。」

だって・・・エプロンドレスの女の子に白いうさ耳の青年（？）といったら白兎しかないでしょう。しかも私のこと、アリスとか言ってるしね。
っていうかアリスって何。
っていうかここどこ。テスト受けなきゃなんだけど。

「まぁ、そう思うのも無理ありませんね。でもここに来たのはあなたがそう願ったからなんですよ?」

ちょっと待て、白兎、人の心を勝手に読むんじゃない。

「口に出してぶつぶついってましたけど。あと、僕のことはシルヴァって呼んでください。」

あぁ、私としたことが。そして、さっきひっかかったこと。

「えっと、シルヴァさん、私が願ったってどういうことですか・・・？」

「敬語はやめてください。まぁ、ゆっくり話していきますから、落ち着いて。」

知的な言い方をするシルヴァさんはむかつくほど綺麗だった。

真昼の三日月（後書き）

なんか・・・いろいろと安易ですみません（汗）
シルヴァ君のプロフィールです☆

名前：シルヴァ・コンディクト
ちなみに、コンディクトは英語のｃｏｎｄｕｃｔｏｒのフランス語読みです。え、なんでフランス語にしないかですって？フランス語なんて知らないからですよ、もちろん☆（爆）
年齢：１８歳
瞳がワインレッド色。漆黒の短髪。色白。
敬語キャラだったりする。
性格はおいおい本文で紹介します♪♪

Who am I ?

まず、この国は「三日月の国」といいます。
あなたのもといた世界とこの国とは違う世界です。まぁ、一言で言えば「異世界」ってことですかね。
この国はもともと、あなたのいた世界ではみ出し者だった僕らの祖先が作り出した世界です。
ざっと３０００年くらい前の話です。祖先たちは見た目が普通の人と違うということで迫害されたわけですが、皆それぞれ一つづつ、異なった能力を持っていました。迫害に耐えかねた彼らは、住人個々の技術を最大に生かし、互いに支えあえる世界を作るために持てる能力をフルに使いました。その結果がこの国です。確かに桃源郷のようなところにはなりましたが・・・ここには太陽が現れませんでした。月も決して満ちることなく、かといって消えることもない。ただ、細い三日月が常に頭上にある。それがこの国の名前の由来です。え、ここには昼や夜がないのかって？いや、ちゃんとあるんです。太陽の姿が見えないだけで、きっとどこかから光は届いている。気候も、季節も存在する。しかし、祖先たちは何か物足りない気持ちに苛まれたわけです。
そんな時、どこかから少女がやってきました。見た目は普通でしたが、どこか寂しげな女の子だったそうです。彼女はアリス・リデルと名乗りましたが、それは彼女の仮の名前に過ぎませんでした。なんとあろうことか、彼女は自分の本当の名前を、そして自分の能力も忘れていたのです。
あ、アリス、質問は後にしてくださいね。
住民たちは戸惑う彼女を受け入れ、大切にしました。すると彼女は心を開き、もといた世界に馴染めなかったこと、どこか遠い別世界に生きたいと願っていたこと、三日月に見とれていたらここに来れたことなどを話してくれました。

三日月の魔力といったところでしょうかね。
そうして、彼女は住民たちにとってまさに太陽のような存在になりました。
しかし、アリスがやってきてちょうど一年たった日に、彼女は消えてしまったのです。
アリスの使っていた小物も、髪の毛一本だって残っていなかったのです。
住民たちは嘆き、悲しみました。国全体が殺伐とした雰囲気になり、もうこの世界も終わりのように思われたそうです。
すると、ある日、またどこからか一人の少女が現れました。アリス・リデルとは別人でしたが、境遇は似ていました。名前と能力を覚えていないところも。住民たちは彼女を『アリス』と呼び、慈しみました。
はい、最初のアリスのときと同じです、結末も。そうして3人の『アリス』が一年後には消えていきました。
しかし、4人目は違いました。最初の立場は同じでしたが、何のきっかけからか自分の名前と能力を思い出したのです、はっきりと。
すると一年たっても二年たっても彼女は消えなかったのです。もちろん彼女だって生き物ですから寿命はありましたが、その前の3人のように存在が消えてしまうようなことはなかったのです。
それ以後も、この国の均衡が乱れるたびに新たなアリスが呼ばれ、ある者は役割を全うし、ある者は消えていきました。そして

「あなたも『アリス』なわけです。」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

うわぁすごい話。まぁ、ここが日本と同じ世界とは思わなかったけどね。確かに私、「おとぎの国」に憧れてたし。しかしすごい世界だなぁ・・・じゃなくって。

「シルヴァ、質問。本当の名前って何。能力って何。」

・・・質問はすぐにできないと気持ち悪いよ。ほんとに。

「アリスは前の世界でなんと呼ばれていたんですか？」

「あ、私としたことが自己紹介忘れてた（汗）山崎恵美、です。」

「その『山崎恵美』という名前はあなたの世界で生きるために仮につけられた名前に過ぎない、ということです。
本当の名前とは、親に決められるものではなく、生れ落ちる前から持っている名前のことです。あなたが二人いないのと同じように、あなたをあらわす本当の名前も二つとありません。」

「う・・・そ・・・」

正直、嬉しかった。
地味で平凡な名前が私みたいって思ってたから。
でも、自分も聞いたことないような名前なんて

「そんなのわかるわけないじゃん！！！！」

「何かのきっかけで必ず思い出せる筈なんです。それにヒントもちゃんとあります。アリスは何かに熱中するみたいなことってありませんでしたか？ずっとずっとやっていたいようなことって？」

いっつもいっつも勉強勉強勉強。試験前はもちろん試験後すぐだって勉強勉強勉強。

そんな私に熱中できることなんて・・・・

「あったはずなんです。ただ、この世界に来る衝撃で忘れているだけ。それがわかれば、名前も思い出せます。そして、その熱中できるものこそが、あなたの能力であり、ここで果たすべき役割なんです。まぁ、おいおいわかります。とりあえず、この世界を知ってください。みんなあなたを待っていたんですから。」

元の世界では決してかけられなかった落ち着いた温かい言葉。
この言葉にすがろうと、私は大きく頷いた。

Who am I ?（後書き）

説明下手でごめんなさい（汗）
次話で住民登場です。

シルヴァのお家へ

「さて、状況の説明も終わりましたし、住民に会いに行きましょうか？」

「うんっ！！！」

という会話の後ひたすら森の中を歩き続けてるんだけど・・・・・

「シルヴァ、まだぁ？」

「もうちょっとですよ」

この応答でもう12回目。嗚呼足が痛い。。。

「アリス、そんなに疲れたんですか？」

「うん、かなり。この辺で休みたいな～なんて・・・」

「そうですか、では」

休ませてくれるのかと思ったら、次の瞬間私はシルヴァに横抱きにされていた。

「ちょっちょっとシルヴァ！！！！！降ろして降ろして降ろして降ろして！！！！！！」

「うるさいですよ、アリス。あぁ、この方が早いですね。ちょっと走りますんで、しっかりつかまっていて下さい。」

「ふえっ？？！！」

耳元で風を切る音がする。さすが兎。速さが並みの人じゃない。っじゃなくって。

「アリス、顔が赤いですよ。大丈夫ですか？」

あんた、よく走りながら人の顔覗き込めるな。
こんな美少年にいきなりお姫様抱っこにされて顔覗き込まれたらどんな女の子だって顔が真っ赤っ赤になるよ。

「シルヴァ～重くない？」

私は身長１７０ｃｍで、しかもそんなにスリムな方じゃない。シルヴァは１９０ｃｍは軽く超えてる感じだけどっ

「いやぁ、軽いですよ～。ちょっと長いですが。」

おいっ人が気にしてることさらっと言うんじゃねぇ。泣きたくなってきたよ、トホホ。

「着きましたよ～アリス。」

あぁ、スルーですか。そうですか。

「何捻くれてんですか、アリス。さぁ、降りてください。」
そっと手を添えてもらって降りた私の目の前には・・・

「ドコノオタクデショウカ。」

「あ、ここは僕と帽子屋と三月ウサギの3人で住んでいる家です。そんなに広い方じゃないですが、なかなか居心地はいいですよ☆」

お洒落な洋館みたいな家。壁は真っ白でところどころに水色の模様が入っている。三角屋根も水色で、かわいい窓もついている。大きな門の先には広い庭があって（噴水もある。）、その先に金で縁取られた白いドアがある。大きいなんてもんじゃない。メガだ。いや、ジャイアントだよ。私の学校の敷地と同じくらいかな・・・・っていうか。

「シルヴァってそんなにお金持ちだったんだ・・・」

「いやぁ、うちはこの国では中の下くらいの大きさですよ。あんまり広いと落ち着かないのでこの大きさにしてもらったんです。」

本当にすごい国・・・。

「アリスが来るってわかったのは昨日の夜だったので、まだ部屋の準備ができてないんです。すみませんが、来客用の部屋を使ってくださいね。」

「いえいえ・・・こんな豪邸に泊まれるだけでも本当にありがたいよ。

・・・・そういえば、どうして私が来るってわかったの？『アリス』って突如として現れるんじゃなかったっけ？」

「あぁ、そのことですか・・・。う～ん・・・話が長くなりますので、とりあえず中に入ってゆっくりしましょう。」

シルヴァがドアの上についているベルをチリンチリンと鳴らすと、中からパタパタと音がして、ドアがばたんと開いた。

そこにいたのは超美少女。ウェーブのかかった金髪にぱっちりと開いた空色の瞳。肌は雪のように白くって、フリフリの黒いドレスがよく似合う。そして、彼女の髪からは茶色のうさ耳。

「シルヴァ、早かったのね！！！！この方がアリス？かわいい～☆★」

きゃーと嬉しそうな声を上げて、超美少女は私に抱きついてきた。きっと私の顔は真っ赤で、とても見られないような顔になっているんだろう。。。こんな美少女にかわいいって言われるなんてね・・・・

「ココット、アリスが困ってるじゃないですか。」

「ごめんなさいね、アリスがあんまりかわいいものだから・・・私は三月ウサギのココット・マーチっていうの。よろしくねっ☆」

「よろしく、ココット・・・」

かわいい。超かわいい。やばい、ちょこっと垂れたうさ耳がなんともいえず・・・
って私は変体オヤジかっ（汗）

「アベルはまたお茶飲んでるから、私たちもお茶会にしない？アリスが来た最初の日なんだし。」

「まったくアベルは・・・そのうち体中紅茶色に染まりそうですね。アリス、お茶は好きですか？」

「うん、大好き！！特にダージリンが。」

「おっこれは嬉しいな、アリスと同じ好みなんて。」

ん？今のは誰だ？
ばっと振り返るとカップを片手に持った青年と眼が合った。

「どうも、帽子屋のアベル・マッドハッターだ。以後よろしく。」

「何が以後よろしくですか、どこから出てきたんです、アベル。」

「だいたい立ってお茶飲んじゃだめだって言ってるでしょ！！こぼしたらどうするの！！」

青年・・・アベルはかっこいい登場がしたかったんだろうが、二人に怒られるとしゅんとしてしまった。かわいい。黒い大きなシルクハットに赤い薔薇を一輪差している。髪は茶色で無造作にまとめていて、灰色の大きな瞳に長いまつげ。こちらもまたまた美青年。

「だいたいアベルはだらしないんだから。この間だって靴下がまた

脱ぎ散らかしてあったわよ！！」

「料理は作っても絶対に片付けませんしね。ゴミだって捨てたためしがないじゃないですか。」

二人の小言は日常生活のことにまで発展してるみたい。なんか・・・姑と小姑みたい。あ～あ、かわいそうなアベル君は涙目ですよ。

「ねぇ、二人ともそのくらいにしといてあげたら？」

「あ～アリスは優しいねぇ。誰かさんたちとは大違いだよぉ～」

「ほんとにしょうがないわねっ。まあ、アリスにもくつろいで欲しいし、お茶会始めましょうか。」

「じゃ、僕お茶淹れますね。」

「「わ～い！！！！」」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「アリス、どうぞ。ダージリンです。」

「ありがとう。」

ふわっと香りが広がる。

「すっごく美味しい。」

「そうですか、アリスに喜んでもらえてよかったです。」

「ホント、シルヴァの紅茶は最高だよな。」

「アベル、あなたはもう少し勉強しなさい。」

「へ～い。」

「・・・そういえば、シルヴァ、さっきの話。」

「あぁ、そうでした。アリスが来ることがわかった理由ですよね。三日月の魔力とは言えど、あちらの世界で普通に暮らしている少女がいきなり消えたら大問題です。初期はそんなことには眼を瞑っていたのですが、アリスについて理解が進んだ中期ごろから、アリスにそっくりな少女を代わりに送ることにしたんです。この国にアリスとしてやってきたものの、名前がわからず消えていった魂をアリスに似せて。存在が消えても魂自体は残り、永遠に彷徨うみたいですからね。その魂は次のアリスが三日月に引き寄せられるのを感知し、姿を変え、アリスに成り済ます。そのときに私たち三日月の国の住人にも魂から連絡が入るんです。まぁ、いいシステムを作ったものです。それで私が迎えに行くことができるんですよ。」

そうか・・・私がいなくなったら両親は騒いで大変だろうからな。最高の出来栄えの作品が消えるんだから。存在が消えちゃった魂さん。代わり、よろしく頼みます。

「まぁさ、何でもいいからアリスがずっとここにいてくれたらいいのにな。俺たち、アリスに会うのは初めてなんだ。」

「この国の均衡が乱れるとアリスが呼ばれるみたいだもんね。でも、

私はアリス、あなたが好きよ。私たち、力を貸すからねっ☆」

「・・・ありがとう。」

こんな友達持ったの、初めて。
こんな温かい気持ちになれたの初めて。
一年後に消えちゃうかもしれないのに、なんでこんなに幸せなんだろう。
三日月よ、ありがとう。
お父さん、お母さん、さようなら。
あなたのいい子ちゃんはバトンタッチしました。

・・・気づかないだろうけどね。

at　バルコニー

三日月の照らすバルコニー。
ふらりと立ち上がる一人の少女。
風に揺れる黒髪。
寂しげな茶色の瞳。
ふっとため息をついた彼女はじっと三日月を見つめる・・・

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
山崎恵美だって。

・・・さえない名前。
この家だって・・・
さえない。
部屋だってさえないし。
鏡を覗き込んでみる。
あ～やっぱり。さえない顔。
スタイルだって微妙だし。
とりえは勉強だけみたいだね。
うわ、この子、あたしの一番嫌いなタイプかも。
点取り虫で温和な顔して、何考えてんだかさっぱりわかんないって
いう人。
いるよね、クラスに一人くらい。

まぁ、いいや。
この役になれたのもすっごいラッキーなんだから。
ちょっとくらい環境が悪くたって我慢しなきゃね。

顔は、このくそダサい眼鏡さえどうにかすればなかなかいけるかもだし、
スタイルはあたしの努力でなんとかしよう。
部屋はかわいくしよう。
親や友達にばれなきゃ毎日平穏に過ぎるはず。
ばれるわけがない。
だれが何を考えてるのか、あたしには全部わかるんだから。
だれにどう接したら好かれるのか。
文句を言われたら、相談事をされたら、告白されたら、怒られたら、何て言えば一番効果的か、どんな態度が一番いいのか、全部知ってる。
記憶力は抜群だし、どういう子がみんなに愛されるのかあたしはよぉく知ってる。
ちょっと変わったなとは思われるかもしれないけど、
まさか人が摩り替わったなんて気づく人がいるわけがない。
可愛くて優しくて、勉強もスポーツもなんでも出来て、心配りがちゃんとできる子になることを嫌がる親がいるわけがない。
ふふっ。
当分はうまくやっていけそうね。
そう、当分は・・・・・・。

わかってる。
あの子が消えるとあたしも消えちゃう。
あの子っていう存在が最初からなかったことになるから。
全てはあの子次第なんだって。
だってあたしは代役だから。
でももう消えるのは嫌なの・・・・・。

あの何にもない真っ白な世界。
一人ぼっちで、身体もなくって、記憶もなくして、ただ心だけが残ってるあの世界。
時間さえもわからないから、
無の恐怖が永遠に続く気がしてた。
だから。
新しいアリスが生まれるって聞いて、すごく嬉しかった。
代役をやりたい魂はいくつもあったけど。
みんな蹴散らして掴んだこの身体。

手放したくない。

だから。

アリス、がんばって。
思い出して。
あなたは誰なの。

あたしはもう一度三日月を見上げた。
祈るように。

at　バルコニー（後書き）

わけわかんなくてすみません（汗）
これからわけわかるようにしていくつもりなのでっっ（汗）よろしくお願いしま～す☆

二人の一日

何のために生まれて♪
何をして喜ぶ♪
わからないまま終わる♪
そんなのは嫌だ♪

皆さんご存知のア○パ○マ○のテーマソング。
確かにかわいい。
かわいいが。
これで朝起きるのはかなり嫌だぞ！！！！
趣味悪いよ、山崎恵美・・・否アリス。
頭の中でエンドレスで流れ始める。
明日から他の曲に変えなければ・・・・。

「めぐみ～早く起きてらっしゃい！！今日は英語のテストでしょう！！！！」

「は～い！！」

そうだった。今日は英語のテストだった・・・らしい。
大丈夫。あたしは見たもの全てを瞬時に記憶するという能力を持っているから。

あ、今嘘だと思ったでしょ。

ほんとだよ。
あたしの記憶力は宇宙一なんだから！！！！！

「めぐみ～何してるの！！早くいらっしゃい！！！！」
「早く来なさい。今日はテストなんだろう？」

うわ、煩い両親。
っていうか朝から二人してぎゃーぎゃー子供に文句つけて・・・
馬鹿じゃないの。

「あっごめんごめん！！ちょっと考え事しちゃった～」

極上の笑顔を振りまいて両親のところへ向かう。

「昨日はちゃんと勉強できたのか？」

「うん、ばっちり。」

「この間もそんなこと言っていたけど、９８点だったじゃない。どこを間違えたのよ。」

「うんと・・・スペリングを一個。でも今回は大丈夫。満点取ってくるよ。」

「うん、当然だ。がんばれよ。」

「じゃあ、行って来ます～」

「車に気をつけるのよ。忘れ物しないでね！」

小学生かよ。

っていうか満点逃したくらいでそんなごちゃごちゃ言うなっつうの。

あほくさ。

アリスの気持ちがちょっとわかった気がする。

しかし、全く違和感を感じてないのにも驚いたね。

自分の娘の変化にほんのちょっとだって気づかないなんて。

あの両親は娘じゃなくて、娘のテストペーパーが、娘の名誉が可愛いんだな。

あたしはそう見たよ。

これで満点持って帰れば自分の娘の出来栄えに大いに満足するんでしょ。

単純だね。

ま、大いに喜ばしてあげましょうかね。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

こちら三日月の国。

ただいまアリスちゃん質問タイム。

「そういえば、この国の人たちの本当の名前って何なの？

本当の名前っていうのがどうもよくわかんないんだよね。」

「そうだな、例えば俺の本当の名前は『アベル・マッドハッター』だ。この国の住民はみな、自分の本当の名前を普段から使っている。名前って言うのは呼ぶ人がいて初めて大きな意味を持つからな。アリスのもといた世界の人々は本当の名前を使わなくなってしまったから、忘れ去られるようになっちまったんだろうな。本当の名前っ

て言うのは、生まれる前から知っている名前のことだ。魂の名前ってところかな。この国の子供たちは言葉がしゃべれるようになると、始めに親に自分の名前を知らせるんだ。僕の名前はアベル・マッドハッターです、みたいにな。」

へ～不思議な感じ。

「名前は魂の性質を現すのよ。だから、名前とその魂の得意分野、つまり『役割』は切っても切り離せない関係にあるのね。」

そう説明したのはクッキーをつまむココット。

あぁ、ものを食べる姿が絵になる人ってうらやましい・・・。

私たちはあれからずっとお茶会を続けている。もう3時間くらい紅茶を飲んでいる気がする。

シルヴァはさっき、女王に呼ばれたとかいってぼやきながら出て行った。

「なんで案内人の僕がアリスの傍を離れなきゃいけないんですかね・・・」

とか言いながら。

「夕方までには絶対戻ります。アリスをよろしく。」

って言って、風のような速さで走っていった。

「ねぇ、アリス、今度はこのマカロン食べてみて☆」

「え、もうお腹いっぱい・・・」

「なんか言った？」

百万ドルの笑顔。
怖いよ、ココットちゃん。怖いってば！！！
これでもう８回目。美味しいお菓子ならいくらでも食べれると思ってたけど、
そして、ココットのお菓子は本当に絶品なんだけど・・・
流石にもう無理・・・。
助けを求めるようにアベルを見たら、こっちはニヤニヤ笑ってる。

「あ、ありがとう。」

満足げににっこり笑うとココットは私の前に色とりどりのマカロンを積み上げた。

「全部食べていいのよ☆」

彼女のｍａｙはｍｕｓｔと同意義だ。
この３時間で私は学んだ。
とりあえず頂点のピンクからつまむ。
口の中に甘酸っぱい味が広がる。イチゴ味。
美味しい。
美味しいんだけど・・・
それを口に出してはいけない。
「もっとどう？？」
と言われて、山がさらに高くなること間違いなしだから・・・。

「ただいま～」

きゅ、救世主登場！！！まともなシルヴァはきっとこのマカロンを何とかしてくれるに違いない！！

「お帰り、シルヴァ！！！！！！！！」

「どうしたんです、アリス。そんなに嬉しそうな顔して・・・」

私は目でマカロンの山を指し、訴える。

「あ～ココットですね。良かったですね、美味しいお菓子をたくさん食べれて。」（にこにこ）

だめだ。

この国の人たちはどこかがずれているに違いない。

「アリス！！ものを食べている最中に立っちゃだめでしょ！！！」

「は～い。」

諦めて大人しくマカロンにもう一度手を伸ば・・・・

「あれ？」

マカロンが消えた。

私の横にはネズミの耳のついた小さな男の子が幸せそうに寝ている。

口の周りに色とりどりのかすが・・・・

「ま、まさか、一瞬であの山を食べたんじゃないよね・・・？？」

「あぁ、きっとそうですよ。ネズミはほとんど寝ているので食べら

れるときには何でも口に入れるんですよね。」

「そうそう、この前なんて寝ぼけて私のリボンを食べようとしたんだから。ほんと、びっくりしちゃう。」

あんまりびっくりしていないように言うところを見ると、いつもそうなんだろうな、この子。

「眠りネズミ君・・・？」

「そうそう、この子は眠りネズミの」

「ぼく・・・・・・・・・・・・ロィ・・・・・・シュ・・・ラ・・ン・・バー・・・・・・」

「何言ってんだかわかんねぇよ、ロイ。アリス、こいつロイ・スランバーっていうんだ。」

「この家に住んでいるみたいなんですけど、いつの間にか現れていつの間にかいなくなるんですよ。」

「変なとこから出てくるしね～。オーブンの中から出てきたときは焼いて食ってやろうかと思ったわ～☆」

あの、ココットさん・・・怖いんですけど。

っていうかオーブンの中で寝ちゃうロイ君もびっくりだなぁ。

お腹すいてたのかな・・・・（笑）

「そういえば、アリス、部屋をまだ見せてなかったわよね？」

「へ、部屋？？」

「ほら、今日からここがあなたのお家だから、自分の部屋も必要でしょう？
今日は準備が間に合わなかったから、ちょっと狭いだろうけど客室をつかってもらうわね。」

あ、そういえばシルヴァもそんなこと言ってたっけ。

「俺も掃除したんだぞ！！！」

「アベルは掃除ではなく暴れていただけでしょう。かえって僕らの仕事が増えたんですからね。」

「うっ・・・」

「アリス～こっちよ～」

あぁ、ココットさん無視の方向ですね。了解しました。

「何ぶつぶついってんのよ～早くぅ～☆」

「はぁい！！」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「ここよ～」

連れてこられたのは大きな白いドアの前。家のドアと似ててすごくお洒落。

「さぁ、どうぞ☆」

ぎぃっと音をたてて開いたドアの向こうは・・・

「うわぁ・・・・・・」

金色の縁取りのある大きめの窓に短めの綺麗なレースカーテン。
真ん中にはふんだんにピンクや白のレースやリボンが使われている大きな天蓋つきベッド。
他にも衣装箪笥やら鏡やら全てが白やピンクやレースやリボン・・・・
つまりかなり少女趣味のお部屋。

「可愛い・・・・」

「本当！！よかったぁ気に入ってもらえて☆これ、私の趣味なのよぉ～衣装箪笥も見てみて！！！！」

観音扉をココットがガラッと開けると・・・

「部屋？？？」

「あぁ、衣裳部屋よ～。とりあえず13着しかドレスの用意が出来

なかったから、今度一緒に買いに行きましょう☆」

お姫様系のピンクのドレスや、真っ赤なタイとドレス、青いベルベットのドレス、若草色のドレスｅｔｃ・・・が４畳くらいの小部屋に並んでいる。

「ココット・・・これって誰の？」

「何寝ぼけてるのよぉ！！全部あなたのよ～」

「えっえっこんなに高そうなドレスばっかり「大丈夫こんなの安いから☆」そういう問題じゃなくって「アリス！！！！！！！」ひゃっはい！！」

「あなたはアリスなの。私たちの希望なの。太陽なの。
この国では経済的な問題っていうのはまずありえないのよ？
そんな国においてあなたが部屋だのドレスだのをいちいち金勘定して断ってたら、住民がみんな落ち込んじゃうわ。ここは大人しくもらっておいて、ね？」

ココットのすごい剣幕に押されてとりあえずうなずく私。
そうか・・・私だけの問題じゃないんだね・・・。

「ありがとう、ココット。」

「わかればいいのよ☆お風呂はこっちで、ＷＣはこっちね。それから・・・」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「ふわぁ」

思いっきりアホ面をしてベッドにダイブする。
ふっかふか。気持ちいい・・・。
あのあと、ココットに屋敷の中を大体説明してもらって、思いっきり豪華な夕食を食べて、
広い広いお風呂に入って、今に至る。
それにしても・・・と我が身体を見る。
何でネグリジェなんだ！！
ココットに「もっとカジュアルな感じのってないの？」
って聞いたら、「それが一番はだけてないわ★」と笑顔で言われた。
なんだ、その「はだけてないわ」って。
それを聞いたアベルが「うわぁ、アリス顔赤いよぉ～あはは～」
と言ったのも気に食わない。

こんなに至れりつくせりなんだから、ネグリジェぐらい我慢しよう。
自分に言い聞かせつつベッドにもぐりこむ。

疲れていたからすぐに寝てしまったような気がする。

風にカーテンがなびいているのに気づかずに。

見えない手（前書き）

更新遅くなってすみません（汗

見えない手

ナンデコンナコガ・・・・

・・・カミナンテヘンナイロ

キットアクマノイロヨ・・・・

キエテシマエバイイノニネ

ソウネキエテシマエバイイノニネ

キエロ

キエロ

キエテシマエ

キエテシマエ

・・・誰!!??

寒気がして飛び起きる。

眼をがっと開くと、目の前にもやのようなものが渦になっていて、
霧の中にいるみたい。
でも、ときどきちらちらと見える家具やなんかは、ココットとシルヴァ（とアベル）が用意してくれた部屋に違いない。
ふと、窓のほうに眼をやるとカーテンが風に揺れている。
あぁ、窓開けっ放しで寝ちゃったんだ。
霧が出てるんだ、きっと。
ちょっと安心して、安らかに二度寝をしようと・・・・・・

「ぐっ・・・・・」

何か冷たいものに首を掴まれた。
尋常でない力で締め上げてくる。

「だ・・・れ・・・・」

「アナタナンカキエテシマエバイイ。
ワタシタチトオナジヨウニ・・・・・・
アナタハアリスニフサワシクナイ・・・・・
キエテオシマイナサイ・・・・・」

「・・・っ！！！！」

背筋が冷たくなるような恐ろしい単調な言葉。

でもその言葉が泣きたくなるくらい悲しいのは何故??

私は今わけのわからないものに殺されそうになっているのに、
どうして目頭が熱くなるの・・・？？

「あなた・・・だれなの・・・っ・・・・」

「アア・・・・・・

サミシイヨウ

ツライヨウ

サミシイヨウ

サミシイヨウ

アァ

ナラナケレバ・・・・・・

ソウ、コンナトコロニコナケレバ・・・・・・・

ソウダ・・・

ソウヨ・・・

コンナコキエテシマエバイイノ・・・

イマスグニ・・・・・・・・・・・・・」

首にかかる力が強くなる。

いくつもの声が部屋をさまよう。
何でこんなことに・・・??
これは何なの・・・??
いくつもの疑問が私の頭の中に浮かぶ。
ああ、でも意識も朦朧としてきた・・・・・
もう・・・・・だめかも・・・・・・・・・

「たすけて・・・・・・・・・・」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

心を落ち着かせる作用があるというバームミントティー。
僕の大好きなお茶の一つだ。
夜、みんなが寝静まったころに一人仕事を片付けながらこうして一息入れるのが僕の日課だったりする。
それにしても、明日あの人にアリスを会わせるのか・・・・・
僕は今日の出来事を思い出していた。

「あ～シルヴァ、待ってたのよ☆新しいアリスはどんな感じの子？年は？顔は？髪は？スタイルは？性格は？」

「いきなり呼び出しておいてそれですか、イザベラ。何で案内人の僕がわざわざアリスの傍を離れて、あなたに彼女の説明をしなくちゃいけないんです？」

「怒っちゃだめよ、シルヴァ☆怒りんぼは嫌われちゃうわよ～」

「・・・・・・」

読者の皆さんに注意していただきたいのは、僕はここで二の句が継げなかったわけでも、あきれ果てて言葉が出なかったわけでもない。ただ、このぐだぐだ女王、イザベラに無言で怒りを表しただけだ。この人にイラつくのは今回が初めてではないのだが。

「えっと、明日アリスちゃんをここに連れてきてくんない??」

僕の無言の怒りが通じたらしい。といっても全く堪えてはいないようだが。

「『すぐにアリスに会っちゃうと、女王としての威厳とか、ミステリアスな感じとかが出なくって嫌!!』って言っていたのは誰でしたっけ?」

「気が変わったの!!!!細かいことにこだわるんじゃない、白兎!」

「どこまでも勝手な人ですね。」

「そういえば・・・・」

急にトーンを落として顔をぐっと近づけてくる。

僕のつっこみは無視する方針らしい。

「アリスにあの抜け道の話はしたの?」

・・・・・・抜け道。

「そんなの、アリスに使わせません。」

あれは使ってはいけない、狂気の産物だから。

「でも・・・・・・」

「抜け道を知ると気も緩みますし、あんなもの最初からないものとして考えたほうが良いんです。」

「そ、そうね。そうなのよね。」

心配そうなイザベラ。彼女はきっとアリスを気に入るだろう。何としても守りたいと思うだろう、僕らと同じように。でも、あれだけは駄目なんだ。

僕は自分に言い聞かせて、家に戻ったのだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

あれで良かったのだろうか。

いけない、一人になると同じ問題をいつまでもぐだぐだと考えてしまう。

そんなのに大して意味はないのに。

ちょっと気分を変えよう。今度は久しぶりに珈琲でも入れようかな。

そう思って立ったときだった。

「助けて・・・・・・・」

小さな小さな消えそうな声。

ちょっと離れたところから・・・・アリスがいる部屋の方で聞こえる！！！！
そう思うよりも早く、足はその方向へ向かっていた。

僕の自室からアリスの仮部屋に行くには一回外に出なければいけない。
客室に一回通したのを今更ながら後悔しながら、三日月のみの明かりの中で走る。

・・・あれ？

僕の前を走る影。
長い耳に長い髪の毛。あれは

「ココット！！！」

「あ、シルヴァ！！」

「アリスに何かが・・・？？」

「私、何か悪い気が入ってくるのを感じたの。すごく寒気がしたわ。で、その位置を特定してみたら、何とアリスのいる部屋からだったの。
屋敷には入ってこられないように、バリアを張っていたはずなのに・・・・・・
窓を開けて寝ないように注意しておくべきだったわ。」

すごく悔しそうに唇を噛むココット。もちろん僕らは走りながら話

している。

「僕はアリスの『助けて』っていう声を聞いたんです。あ、ここですね。」

ドアを開け放とうとする僕の手首を彼女が掴む。

「放してくださいよ！！アリスが危ないんですよ！！」

「今ここで入っていったら更に危ないわ。相手は多分、昔のアリスの魂よ。かなり性質が悪いわ。外からこの部屋にバリアを張るから、私が良いって入ったらドアを開けて。私が幻影を使っておびき寄せている間に、あなたはアリスを連れてリビングに行って。」

「・・・わかりました。」

ココットはこの国有数の魔法使いだ。彼女ならわけのわからない霊にやられることはないだろう。でもアリスは・・・・・・

ココットは眼を閉じて呪文を唱え、手を動かしていく。すると、だんだん中が騒がしくなってきた。

手が汗でじっとりと濡れている。僕は案内人なのに・・・・・彼女を守らなきゃいけないのに・・・・どうしてこんな時に何にも出来ないんだ・・・！！！

「シルヴァ、開けて。」

冷静なココットの声。そうだ、自分を嘆いているばかりじゃ何も変わらない。

「いきますよ」

さっとドアを開き、部屋の中央に向かう。
霧のようなものが部屋に立ち込めていて、視界が悪い。
ああ、でもベッドにぐったりとなっているのは

「アリス！！！！！！！！！」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

あれ、この声はシルヴァ・・・？
首を絞めていたものがびくっとして離れる。

「ちょっとしばらく我慢していて下さいね。」

ひょっと俵担ぎにされる。

「マテニゲルツモリカ。
ニガサナイ。
ニガサナイゾ」

「あなたたちの相手は私よ。」

凛とした綺麗な声。

「えっココット？！」

「彼女はきっとうまくやってくれるでしょうから、僕らは逃げます

よ。」

嘘でしょ??ほっといていいの??

彼は困惑、というよりは驚いている私をしょって、すごいスピードで走り出した。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

霧のような中、一人微笑を浮かべて立っている少女。
彼女はふっと艶かしく笑うと唇を開いた。

「アリスに手を出したものは誰であれ、許さないわ。
・・・・・たとえそれが、昔のアリスであっても。」

「ウルサイ。

オマエニナニガワカル。

キエタクルシミ。

サマヨイツヅケルツラサ。

アア・・・・」

「そうやって自分を哀れんでるからいつまでも苦しみが続くのよ。
大体、抜け道を使えば消えることはなかったはずよ。」

「ソンナノ、ワレラノジソンシンガユルサナカッタ。
イマハ、ドウシテアノテヲツカワナカッタカト、コウカイシテイル。
」

「ふぅん。色々と考えてるわけね。でも後悔したって何にも生まれないことくらいわかってるでしょ。いつまでもめそめそしてて馬鹿みたい。
まぁ、いいや。トーキングタイム終了。
先代アリスに昔のこと聞いとくのもいいと思ったのよね。
じゃあ、可愛そうな魂たちを清めてあげましょう・・・」

ココットの瞳がきらりと光る。
手を高々と掲げ唇が動き出す。
もはや霊たちが逃れるすべはない。
どんなにあがいても、ココットを傷つけようとしても無駄なのだ。

「エーリアグーシュナリアテント、アムエスティムオナリャボルトナ
彷徨える魂よ、今汝を解き放たん。
汝は黄泉の国の業火にさらされ、清められるべし。
長い苦しみの後に汝の心清くなるべし。
エーリアグーシュナリアテント、アムエスティムオナリャボルトナ
エーリアグーシュナリアテント、アムエスティムオナリャボルトナ
！！！！」

断末魔の声の後、一瞬辺りが金色に輝き・・・・・・
何事もなかったかのように部屋は再び眠りについた。

「ココットちゃん、大成功☆」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「ねぇ、シルヴァ！！ココットは大丈夫なの？あれは何なの？」

「落ち着いてください、アリス。ココットは強い魔法使いです。あんなものに負けたりはしませんよ。」

「へ？？」

あの、超美少女が強い魔法使い？？？？

「彼女の力をみくびっちゃいけません。アベルなんて前にココットを怒らせて蛙にされてましたよ。」

すごい・・・・でも蛙に変えるとか古典的だなぁ。

っていうか標的はシルヴァじゃなくってアベルなんだね（笑）

「そういえばアベルは？」

「彼には僕らみたいな発達した耳もありませんし、ココットのような魔力もないので、多分今頃夢の中ですよ。」

「ふふっ」

彼らしい。

「僕はアリスの声を聞いて、慌てて走っていったらココットに会ったんです。
彼女は悪い気を感じたとかで。」

「そうなんだ・・・・・・」

こんな真夜中に2人に心配かけて。
私ったら一人じゃ何にも出来ないのに。

「アリスはあの霊に何をされていたんです？」

「首を絞められて・・・・・
すっごく怖かった。
でも、なぜかすごく悲しかったの。
何でかわからないんだけど、他の人の気持ちが自分の中に流れ込んでくるみたいな感じだったの。ねぇ、あれはなんだったの？」

「名前を見つけられなかった昔のアリスたちです。
もちろん、全てのそういうアリスたちが怨念を持っていつまでもうじうじと後のアリスにちょっかいを出すわけではありませんが。」

「ねぇ。私も名前を見つけられなかったら消えちゃうんだよね？
あんな悲しい辛い思いしたくないよ・・・・・・
私いやだよ・・・・・
ずっとここにシルヴァとココットとアベルとそれからたまにロイ君と住んでたいよ。
初めて来た場所で初めて会った人たちだけど、初めて居場所が出来たと思えたんだもん。

そんなの・・・・・いやなの・・・・・・・・」

涙がなぜか止まらない。
まだまだ時間はあるはずだけど、でもなんだかすごく怖くって。

「アリス。」

顔を上げるとすぐ近くに彼の顔。

「何があっても僕らが守りますから。
絶対アリスが消えないように、守りますから。
だから、涙を拭いてください。」

「ひっく、ありが・・・・と」

「明日は女王がアリスに会いたがっているので、お城へ行きましょう。」

「女王??」

「きっと気が会うと思いますよ。」

まだ会っていない人がこの国にはたくさんいる。
知らなきゃいけないこともまだまだたくさんある。
私は涙を拳で拭って、彼に笑顔を向けた。

初めての学校

この学校はずいぶんと古いみたい。
でも厳しいのかな、掃除が行き届いていて廊下もすべすべしてる。
すごくいい環境のはずなのに、ここはなぜか・・・・
息苦しい。
高校生の教室が集まっているこの階はなんとなくピリピリしてて・・・・

なんかすっごく嫌な感じ。。

教室をのぞくとみんな座って参考書と睨めっこしている。

へ、馬鹿じゃないの！！！
朝っぱらからおしゃべりもせず、漫画も読まず。

部活の朝練は？外で遊ぶとかないの？

あたしが教室を覗いて顔をしかめていると後ろから声をかけられた。

「おっはよ～めぐ☆」

ぼさぼさのショートカット、三日月みたいな眼、短い睫、セルの眼鏡、ひざ下６ｃｍはありそうなスカート、短いソックス。身長約１５５ｃｍ～１５７ｃｍてところかな。
あたしの記憶によるとこいつは有田雅代だったと思う。
あだ名はなし。がり勉なのに勉強が出来ないって言う痛い人。
本人もさえないやつなら、友達もさえないやつってことね。

「お、はよ、まさよ。」

「ねぇ、めぐ、悪いんだけどさ、化学のノート貸してくんない？
私、授業はすごく面白いと思ったんだけど、なんか途中でお腹痛くなっちゃってさぁ。
我慢してたら先生に保健室行けって言われて～。
あ、あとこないだ借りた歴史のノートなんだけど、家でいろいろとあってまだ写してないのね。だから・・・・・・・・」

「あ、もういいよ。いまノート持ってくるから。」

言い訳ばっかり。心の中で何思ってるんだか。

「はい、どうぞ☆」

「あ、ありがとうめぐぅ～！！いつもほんとごめんねぇ」

これ以上ないくらい優しい微笑を浮かべ、じっと雅代の眼を見つめる。慌ててあの子が逸らそうとしても駄目。逃がさず、そのままじっと覗き込んむ。するととだんだん彼女が二重にぼやけて見えてくる。実体としての雅代のから心だけが浮いて、喋ってる感じ。
そう、これがあたしの心の覗きかた。ああ、聞こえる、聞こえる。

『めぐってほーんと便利な友達。自分でノートととらないであの子のノートと貰った方がよっぽど楽だし、効率良いし。このままあの子のノート焼き捨てちゃおっかな～。そしたら哀れな彼女は勉強できなくって再試になるかもね。あは、こういうのって最高～☆たまにはあの子も敗者の屈辱を味わったほうがいいもんねぇ～』

うわぁ・・・・。
気分が悪くなる。反吐が出そう。
友達面してよくそこまであくどいこと出来るね。
ある意味尊敬しちゃう。

嫌気が差してぱっと眼を逸らすと、彼女は我に返って「ほんとサンキュー」と言って離れていった。
有田雅代か。今度ノート取り返さなくっちゃ。
最初に会った友達があれなんて、ついてないわぁ。

・・・・でも、この後あたしは両手の指では足りないほどたくさんの、嫌な友達面したやつらと会わなきゃなんなかったんだ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
あたしの席は一番後ろの窓から3番目。
うん、机の中も綺麗でいい感じ。
友達は・・・・・・
首を回して教室をぐるりと眺める。
あ～あ。みんな朝から英語ばっかりやってる。

・・・・そんなにやんなきゃ出来ないほどお前らアホなのかよ。

ま、進学校だからしょうがないのかもね。
今のうちに時間割の確認しとこ。

今日の時間割は・・・・
一時間目：国語
二時間目：数学１
三時間目：英語（テスト）
四時間目：数学２
～昼休み～
五時間目：家庭科
六時間目：家庭科
七時間目：経済

ふ～ん。よかった、貸しちゃったノートの科目がなくって。
いつ取り返そうかな。

頬杖をついていろいろと考えてると、また声をかけられた。

「おはよう、山崎さん。」

ねちょねちょした嫌な甘ったるい声。
ふりむくと黒いロングヘアーにミニスカートの子が、「あたし可愛いでしょ？」って感じの笑顔を振りまいて立っていた。
ああ、声と顔がぴったりマッチする。しかもさえない取り巻きを三人連れている。

「お、おはよう。」

「今日の英語のテストなんだけど・・・・勉強した？」

「一応、ね。」

ぶっちゃけしてない。英語なんて、勉強しなくてもわかるもん。
でも彼女・・・・確か溝口さんだったと思うんだけど、はその答えに満足しなかったよう。
口の端をすっと上げて視線をきつくする。

「そんなこと言って、頭にたくさん詰め込んであるくせに。
まあ、いいの。私の用件はね・・・・」

溝口さんの目が怪しく光る。
そして私の耳にそっと囁く・・・・・

「へっカンニングの許可？？？」

「知恵は共有、幸せも共有しなきゃね。
あなたは満点、私も満点。二人で幸せ、ね？」

「なんでそんなことあたしがしなきゃなんないのよ。」

「あれぇ、この間のテストのときは快諾してくれたのに。
いいの？あのことみんなにばらすよ。」

けっ、小学生レベルの脅し。多分アリスはこの手に弱かったんだろうな。
でもあたしは違う。あたしは彼女よりずっと強いんだから。

「ん～と、あのことって何？忘れちゃったぁ。」

満面の笑顔を向ける。もちろん眼からは強い光を放つ。
「ほ、本当にいってもいいんだね？
クラスみんなを敵に回すことになるのよ？」
あ、焦ってる、焦ってる。
取り巻き連れてるくらいなんだから、きっとクラスの人気者なんだろうな。
でもね。あたしに勝てるわけはないよ。
さて、あたしに脅しをしようとしたその根性叩きなおしてやろうか。
「忘れるようなことなんて言われても構わない。
それで困るのは・・・・・あなたなんじゃないの？」
「わ、わ、わ、私がどうして困るのよっ。」
「あれぇ知らないの？カンニングって校長室呼び出しなんだって。」
「あ、あなただって同罪じゃない！！！」
「何言ってるの？あたしはちょっと手が滑っただけだから。」
「うっ」
返答に詰ったらしい。すると取り巻きたちが攻撃を開始した。
「瑠美子様になんてこと言うのよ！！」
「あなたなんて勉強しかとりえがないんだから、瑠美子様にそれぐらい手助けをしたっていいじゃない！！」

「そうよ、そうよ！！」

うるさいやつら。何が瑠美子様だ。
ふんと鼻を鳴らして私も攻撃開始。

「じゃあ、聞くけど、あなたには『瑠美子様』にお仕えする以外にとりえがあるわけ？
瑠美子様、瑠美子様って、あんたたち金魚の糞みたいね。
そんなに人に尽くすのが好きならもっとましなこと言えば？
自分で勉強しないで人のテスト覗いてしかハイスコアを取れないなんて、ただのアホじゃない。
将来あなたたちのだ～い好きな『瑠美子様』ご自身が困るってわかってるわけ？
ホント、あんたたちって馬鹿ね。」

溝口瑠美子とその取り巻きの顔が真っ青になる。
だって、昨日までさえないただのがり勉少女だった山崎恵美が、いきなり自分たちに張り合おうとしてるんだもんね。
彼女たちは何よ、とか、ふん、とか言いながら離れていった。
最初から牙むきすぎたかなぁ。
でも、大丈夫。あたしは何でも出来る。
人の心掴むのも、怖がらせるのも、尊敬させるのも、そして心を覗くことだって出来る。
みんなに愛されて、尊敬されてやる。

アリスのように。

初めての学校（後書き）

学校の様子は意外と書くのがめんどくさいです（汗）
高慢な恵美ちゃんを書くのは楽しいですけど（笑

疲れた

キーンコーンカーンコーン・・・・・・・

終業のベルとともに長すぎる一日が終わった。

授業もテストもほぼ完璧。

さりげなく発言したり、スカートのすそを綺麗に揺らしたり、

明るく笑ったり。

スマートな女の子として振舞ってみた。

なんかめぐ変わったよね。

みんながそう思って、あたしに好奇の目を向け、

それがやがて賞賛の眼に変わった。

そう、あたしの計画通り、一日目が終了したわけ。

そうなんだけど・・・・・・・・

学校がこんなにも疲れるところだったなんて思いもよらなかった。。

。

友達、教師、クラスメイト。みんな心に感じてることは

嫉妬や、野心や、自己愛ばっかりで、正直うんざりした。

特に腹が立ったのが、友達を大切にしましょうとか、みんなが大切なんですとか、口ではいろいろほざいてるけど、心の中ではあの子とあの子が可愛いとか、どうやったら給料が上がるかとか、そんなことばっかり考えてる教師。

覗いて損したって感じ。

ま、世の中そんなもんかもしれないけど。

ふっ、とため息をつく。

帰ろ。

重たい鞄を抱えて歩き始める。

あの家に帰るのかと思うと、なんだか足取りも重たくなるけど、行く場所も帰る場所もなかった時代に比べればずっとましだと思う。

お腹すいたな。
ご飯なんだろ。
そんなことをとりとめもなく考えながら下足室で靴を履き替えて足早に出て行った。

あたしを、寂しげに見つめている少女がいることなんて全く気づかずに。

三日月の国の朝

「アリス～起きなさ～い！！！」

「ん～お母さんもうちょっと・・・・」

「いつ私がアリスのお母さんになったのよ！！！！」

ばっとブランケットを剥ぎ取られる。

観念して眼を開けるとそこには頬を膨らませて耳をぶらぶらさせている美少女の顔。

そうだった、ここは三日月の国だったっけ。

「あ、ココットか～」

「あ、ココットか～じゃないわよ！！ほら、さっさと起きて頂戴！！もう１０時よ！！」

「うげっ！！！！」

ずいぶんと眠ってしまったようだ。昨日の夜いろいろとあったから・・・・

「はっ、そういえばココット昨日はごめんなさい！！大丈夫だったの？？」

「ああ、昨日ねぇ。う～ん、むかついたからちょっといたぶってやったわ☆」

こ、怖い。怖いよ、ココットちゃん！！！

「でも、これからは気をつけなきゃね、私もアリスも。」

「うん、ありがと。」

「ほら、朝食が冷めちゃうから着替えて早く来て！！」

「は～い。」

もぞもぞとソファーから這い出す。ああ、シルヴァが寝かせてくれたんだ、きっと。

部屋に戻り、服を選ぶ。何しろ華やかなドレスばっかりだから着慣れないと目がちかちかする。

「今日は女王に会わなきゃいけないんでしょう？だったらピンク系×姫系のドレスがきっといいわよ～」

下からココットの怒鳴り声がする。

「ありがと～」

怒鳴り返して深呼吸してから、服の山に突っ込んでいった。

あ、これがいい☆

ぱっと眼についたのは大きなリボンがウエストと背中についている、桃色の割とシンプルなプリンセスドレス。絶対ドレスに私が負けちゃうけど・・・・

まぁ、それはしょうがないよねっ！！

昨日つけていたピンクのリボンを頭に結んで、みんなのところへ。

「おはよう！！！！」

「アリス、おはようございます。」

そういって微笑んでくれるのはもちろんシルヴァ。黒のタキシードで決めていて、本当にかっこいい。

あっ、誤解しないで！！恋じゃないよ！！！ただ、一般的に見てめちゃくちゃかっこいいってだけだからっ！！！！

「おはようじゃなくておそようだろ、アリス！！」

「アベルうるさぁい！！朝からごちゃごちゃ言うんじゃない！！」

「へっ、ねぼすけアリス！！」

「ふ～んだ、へなちょこ帽子！！先がつぶれてるよ～」

「な、なに～！！！」

「二人とも朝からじゃれてると朝食抜くわよ～」

「「げっ」」

エプロンをつけてちょっと睨んでくるココットは超萌！！じゃなくって。

「ココット～お腹すいた～」

「成長期の子供の朝食抜くもんじゃないぜぇ～」

「はいはい、しょうがないわね。」

目の前にほかほかと湯気を立てた朝食が置かれる。

スープと、目玉焼きと、トーストと、ぶっといソーセージ。

アベルはいただきますも言わずにがっついてる。

シルヴァは・・・・上品にトーストを齧り、紅茶を飲んでいる。

ああ、絵になる。

「いただきます！！！」

ソーセージを切ってトーストに乗せてかぶりつく。口の中でバターの香ばしい香りと、ソーセージの肉汁がじゅわっと溶け合ってなんとも言えない美味しさ。

シンプルなメニューなんだけど、一つ一つに手がかかっていてこだわりの一品って感じ。

「すごく美味しい・・・・・・」

「でしょ！！！これ私がつくったのよぉ☆」

「ココットすごい！！」

「今度アリスにも作り方教えてあげるわｖｖ簡単なのよ～」

「わぁい☆」

毎日朝からこんなに美味しいものを食べられるなんて・・・・・

三日月の国ばんざい（笑）

「アリス、朝食が終わったらすぐに女王のところに行きましょう。早く行かないと今日中に帰れなくなりそうですから。」

「えっ・・・・？？」

「女王はすごいお喋りなんで、話し出すと止まらないんですよ。しかもすごいおせっかいですし。」

どういう人だ。女王ってすごく貫禄があって、あんまり話したりしなくて、余は何とかじゃとか言って、椅子の上でふんぞり返ってるイメージだったんだけど・・・。

「イザベラは話し相手にちょうどいいわよぉ☆」

「イザベラ？」

「イザベラ・リジャイナ。女王の本名です。」

「あの・・・・女王を呼び捨てにしていいんでしょうか・・・・首切られたりとか・・・・」

だってアリスの女王は首を切るのが大好きなんだよ?呼び捨てとかしたらすぐにぶった切られそうだよ。

「あははっ、アリス何言ってんだよ!!!」

「そうですよ、首を切るって何年昔のことを言ってるんですか!!」

男どもに大爆笑された。アリスちゃんショック。

「この国の女王って言うのはひとつの役割だから、別に特別えらいわけではないのよ。

ただ、国だからまとめ役が必要なだけ。身分は私たちとぜんぜん変わらないの。

まぁ、イザベラの好きな花は首切り草っていう赤い花だけどね。」

「へぇ・・・」

いい国だ。っていうか首切り草とか縁起悪い花だな。

会うのが楽しみになってきたよ、イザベラって人。

「ほらほらアリス、ご飯が冷めちゃいますよ!」

「俺がもらってやるよ!!」

「だめぇ！！！！」

こうやってじゃれてる時間がすごく愛しかった。

ここが女王様の住まわれる城

「うわぁ・・・・」

思わず感嘆の声を漏らした。

ここは女王の住むというお城の前。

家を出たのは結局９時前くらいで、１０分ほど歩くと到着した。
シルヴァは女王の側近らしい（アベルが教えてくれた）から、城の近くに家を建てたのかもしれない。

私が驚いたのはその大きさもさることながらその装飾の細かさ、そして可愛さだ。

窓は全てハート型。ところどころに蔓薔薇がちょうどよく絡み付いていて、可愛い緑の葉をつけている。壁はクリーム色で、屋根は真っ赤。
大きさはだいたい東京ドームくらい。なんか童話の中のお姫様が住んでそうな感じ。
・・・・事実そうなのかもしれないんだけど。

「アリス、口を開けて突っ立ってるないで下さいよ。ほら、行きますよ。」

「げっ。口を開けて考え事をするなんて私としたことがっっっ！！」

「何ぶつぶつ言ってるんです。さぁ、こっちです。」

「はぁい。」

おとなしくシルヴァに従って門をくぐる。

「あれ？門番とか、トランプ兵とかはいないの？」

「必要ないですから。この国で女王にかなう者はいませんし。」

「でも他の国とかから悪い人が攻めてくる・・・みたいなのは？」

「ありえません。この国は他のどの国、いや、どの世界とはまず接触ができない様になっているんで。あ、もちろんアリスは例外ですよ。」

「ふ～ん。セキュリティーは万全なわけね。」

周りをぐるっと見渡すと一面薔薇。白薔薇、赤薔薇が咲き乱れていて、メルヘンチック。

シルヴァは側室だそうだから特別な出入り口みたいなのがあり、私たちはそこから入った。

あれ、でもここ変だ。

ドアを開けて中に入るとなぜか正方形をかたどって長い棒が四本立っている。その先端を求めて見上げると・・・・・・

天井がない。

どこまでも上に伸びていく四本のなぞの棒。

その真ん中にシルヴァは立ち、私にも来るように手招きした。

「シルヴァ、この棒何？？？」

「あ、アリスそれに掴まっててください。ちょっと動きますよぉ～」

「動くって何が・・・・・うぎゃぁ！！！！！」

動いた。地面が動いた！！！

と思って下を見ると、私たちが乗っている2畳大きさの床が例の棒の上の方に移動してるみたい。どうやら、簡単なエレベーターみたいだ。

こうやって中継してると落ち着いて見えるけど、実際私はかなりびびってて、座り込んで
棒に必死でしがみついていた。

「大丈夫ですか、アリス。」

「大丈夫に見えるか！！！！何で説明してくれなかったのよぉ！！」

「それだけ元気なら大丈夫ですよ。だから動くって言ったじゃないですか。」

くそいまいましい白兎はむかつくほど綺麗な笑顔で私を見下ろしながらそう言った。
もちろん彼は自然な感じで立っている。まあ、ここをいつも使ってるのは彼なんだから当然か。

「はい着きますよ～」

エレベーターガールみたいなことを言うシルヴァに手を貸してもらってうんとこしょっと立ち上がる。なんちゃってエレベーターは音も立てずにぴたりと止まった。

「女王の部屋です。」

目の前にあったのは赤い大きなドア。金色のドアノブがついていて、いかにもって感じ。
エレベーターは床と早代わりし、シルヴァはさっとドアの前に行くとノックしてから言った。

「白兎アリスを連れてまいりました。」

おお～やっぱり女王となるとこういう話し方になるのか・・・・。
なんだか怖くなってきたぞ。

「え、アリスちゃん??入って入って!!!」

誰。

シルヴァは苦笑しながら中に入り、私にも入るように促す。

「失礼します。アリスで「堅苦しい挨拶はいいのよ、アリスちゃん☆」

さっきのはっちゃけた声はやっぱり『女王様』のものだったらしい。
恐る恐る顔を上げると・・・・・

「えっ!!!!!」

「だから言ったじゃないですかぁ。何の説明もなしにあなたに会うと女王というイメージとかけ離れすぎて混乱すると。」

「だってぇ。見てのお楽しみのほうが特別な感じがしていいじゃなぁい☆」

推定２５、６歳。大きなチョコレート色の瞳で、綺麗な金髪をアップにしている。
ちょっと色を抑えた赤いプリンセスドレスなんだけど、私のドレスの何十倍も派手で豪華。
そしてその雰囲気は・・・・・・
声の通り、派手。美人特有ののんきさを持った話し方だけど、ぜんぜん嫌味に感じないのはこの人の気品からだろうか。

「女王のイザベラ・リジャイナよ☆
さぁさ、アリスちゃん座って座って～。今日はいろいろ話したいなぁと思って呼んだんだから。この国の詳しい仕組みとか、これからのこととか。」

「これからのこと・・・・・・」

「で、そういう事務が済んだら、いっぱいお喋りしましょ☆」

ね、と言ってその大きな瞳でウインクをくれた。
ズッキューン。
真っ赤になる私を面白そうにシルヴァが見て、ふふっと女王様が笑って。
私この人好きになれそう。

対人恐怖症の私だけど、この国に来てからその症状が治まってるみたいです。

二人の帰り道（前書き）

文化祭で更新遅くなりました（汗
シルヴァくんといい感じです♪

二人の帰り道

「つ、疲れた・・・・・」

女王・イザベラ様の部屋を出たころにはもう辺りはすっかり暗くなっていた。

「イザベラは本当にお喋りですからねぇ。まあ、アリスも負けないくらい喋ってましたが・・・」

「だってイザベラさんってすごく話が合うんだもん！！ただ、あのテンションで一日中話し続けたら誰だって疲れるよ。」

「聞いてる僕だって疲れましたからね。」

お昼は城の超高級な感じのするランチをいただき、ティータイムを二回挟んで私とイザベラ（とたまにシルヴァ）は一日中喋りまくった。

この国の最高権力は国で一番魔力・精神力・寛容力のある女王にあること。
全ての住民の暮らしはみんな豊かで、大して（というかほとんど）変わらないこと。
この国はアリスがその役割を果たしているときに最も栄えること。
などのこの国についてお勉強をした後、
誕生日、身長、好きなお菓子、服の趣味、嫌いなこと、噂話ｅｔｃ・・・・・
の同学年同士のお喋りみたいなことを話し続けた。約８時間。
初対面なのにすごく話が弾んで、尽きることがなかった。

「また来たいな～」

「いつでも好きなときに来ればいいですよ。」

「でも女王様は忙しいでしょう？」

「あの人は大して仕事しませんから☆」

「女王がそれでいいの・・・？？」

「僕がやったほうが雑にならないんで。」

ああ～納得。

ふと上を見上げるとそこには煌々と輝く三日月。

「綺麗だねぇ・・・」

「本当ですね。この三日月より美しい太陽とはどんなものなんでしょう。

僕はこの国で育ったのでその太陽を見たことがないんですよ。」

「太陽は、すごく明るいの。この三日月の何十倍も。丸くて強い光を放つんだ。

でもね・・・・・」

「でも？」

「私にはその光は強すぎたんだ。何でも照らして追求しようとする

その光に
私は耐えられなかった。でも耐えられないことは許されなかったんだよ。
どんどん居場所がなくなって、本当に辛かった。
辛かったんだよ・・・・・・」

「もういいです、アリス。」

「え？」

突然シルヴァに抱きしめられた。彼の固い胸から鼓動が聞こえてくる。

「アリスはもう三日月の国の住人なんです。
ここにアリスの居場所がある。ここの光は強すぎない。
いつも柔らかな三日月があるだけ。
嫌なこと思い出させてごめんなさい。」

「ううん・・・・・シルヴァが謝ることじゃないよ。」

何故だろう。
彼がこんなにもすぐ傍にいるだけで辛い気持ちがシャボン玉のように消えていく。

「じゃ、帰りましょうか。」

にこっと彼は微笑むと私の手をとって歩き始めた。

三日月は二人の影法師を優しく見守っていた。

チェシャ猫登場！！

二人の帰り道。

黙って歩くこの沈黙も優しくて。

この時がずっと続きますように・・・・・・・

「にゃぼーい☆」

ダレ。

超ＫＹなんだけど！！！！！

ばふっという格好の悪い音を立てて何かが落下した。

「ち、着地失敗。。。。」

怪しいやつ。

猫耳なんかついてるし。猫だったらもうちょっと優雅に飛び降りようよと思う。

「相変わらずＫＹでダサいですねぇ。アリスとの初対面なんですからもうちょっとましな登場をしたらどうです、バカイル。」

「バカイル・・・・？？」

「ちっ、違う！！俺の名前はカイル！！！！カイル・エーヴェンスだ！！！！」

名前はかっこいい。多分これがこの国のチェシャ猫。
チェシャ猫って格好良いイメージだったんだけどな。バカイルだもんな。
むきになって否定するところがなかなか可愛い。微妙に涙目になってるし。
暗いからよくわかんないけど、多分この人もかなりの美形なんじゃないかな。
暗い中で細くなった瞳孔がきらきらしている。

「自称大発明家だが、どじばかり踏むのでみんなからからかわれてバカイルと呼ばれている。
年齢１８歳。実は僕と同い年。役割は「教える者」。」

ウィキペディアのような解説どうもありがとう。

「よろしくなっ、アリス☆」

涙を拭いながら手を伸ばすカイルはなかなか可愛い・・・って年上なんだけどね。

「で、何でアリスに会うためにわざわざ夜中を選んだんですか。怪しすぎるでしょう。」

「やっぱりインパクトが重要だと思ってね。」

「何偉そうに言ってるんです。君ならいつあってもインパクト強いこと間違いないですよ。」

「む、それはどういう意味だよぉ。」

じゃれてる。

兎と猫がじゃれてる。

同い年って言ってな。幼馴染かもね。

「アリスは何にこやかに傍観してるんですか。」

「いやぁ、若いっていいねと思って。」

「・・・・・僕より年下ですよね。」

「アリスって面白いな！！俺気に入った！！」

「カイルだっけ？あなたに気に入られてもあんまり嬉しくないんだけど。」

「うう・・・・・」

あ、また眼が潤んだ。可愛い。

「アリス実はSだったんですね・・・・・」

「ち、違うよ！！ただカイルが涙目になってるのが可愛いかなぁと思っただけ！！」

「ほら、度Sじゃないですかぁ！！！」

「か、カイル？嘘だよ？ほら、これから仲良くしよう？ね？」

「う、うん。」

眼を拳でごしごしこすってカイルはにっと笑った。

年上とは思えない・・・・・幼さ。

「あ～あ。バカイルなんかに会っていると家に帰るのが遅くなりますねぇ。」

「だからバカイル言うなって。」

「ココット今頃怒ってるかもねぇ～」

「いいですよ、カイルのせいにしておけば。」

「あ、そうだね。」

「えっ、ココット怖いから嫌だぁ！！！」

「あはははは～」

顔見知りがまた一人増えた。

不思議な少女

いじめ。

その馬鹿げたゲームの存在を知らないわけじゃなかった。

でもまさか自分がその標的になるなんて思ってもみなかった。

やっぱりクラスの権力者をあなどってはいけないみたいね。

負けはしない。そんなことわかりきってる。

でもやっぱり一人は辛いんだよ。

最初は古典的に、上履きに画鋲がたくさん入れてあった。

机の上にはたくさんの落書き。

中にはごみや、使用済みの鼻紙。

見ただけでうんざりしたけど、とりあえず手を触れないようにして始末。

あたしの様子をくすくすと笑いながら見ていらっしゃる溝口さん。

むかついたからこけたふりしてゴミをぶちかけてあげた。

その後も階段で突き落とされたり、眼鏡を壊されたりさんざんだったけど、あたしにとってそれがマイナスばっかりだったわけじゃな

い。

階段では顔に傷をつけないように、そしてちょっと目立つ位置に大き目のかすり傷を作るように巧みに落ちて（あたしの運動神経をなめるんじゃない）、同情を集めた。

ちょっと眼を潤ませて笑顔を浮かべると、意外と人はひっかかるもの。

溝口一派のほうが居心地が悪そうだった。

眼鏡はボールを当てられたんだけど、それも顔に傷をつけられないようにダサ眼鏡だけを吹き飛ばしてもらった。今度はコンタクトに変えてもらおう。溝口さんに弁償してもらって。

結局、あたしにとって悪いことはあんまりなかったといっても良いだろう。

でもね。

やっぱり辛いんだよね。

あたしは強いけど。

支えてくれる人が欲しい。

一緒に笑って、一緒に悩んで、一緒に泣いてくれる友達。

アリスには・・・・・いなかったのかな。

寂しい。

そう思ったときだった。

「めぐ・・・・・・」

すごくすごく小さな声だったけど、はっきり聞こえた、あたしを呼ぶ声。

振り返るとそこには風に吹かれれば飛んでしまいそうな美少女が、泣き笑いのような表情を浮かべて立っていた。

誰・・・・・？

少なくともアリスの記憶にはない人物だけど、呼び方からして親しい仲だったに違いない・・・・

「何・・・・・？」

「もし・・・・・・・めぐが・・・・辛かったら・・・・・・・・・・・・・・・言ってね。」

「え・・・・・？」

「だって・・・・私たち・・・・・・・・友達でしょ？昨日からめぐ・・・・・・・・空元気みたい・・・・・・・・・・。なんか・・・・・・・・めぐじゃ・・・・・・・・ないみたい。」

嘘。

何で。

二日目から勘付くなんて。

ばれるわけない・・・・と思ってたのに。

「めぐはめぐのままでいいからね。」

アリス・・・・・・・・

あなたはこんな友達をどうして捨てたんだろう。
こんなにもあなたを見ていてくれる人がいたのに。

「ありがとう。」

そういうと少女はふっと微笑んでかけて行った。
あの子は誰なんだろう。

謎と恐れと優しさと。

心の中は不思議のベールがかかってるけど、
いつかきっとわかるはず。

さあ、帰ろう。家に。

あたしの過去

ここは・・・・どこ？

あたしはいつの間にか豪華な部屋の中の天蓋つきベッドで寝ていた。

あ、家に帰ったんだ。

起き上がってドレスを着て、大広間へ向かう。

周りの召使たちはみんなあたしから顔をそむけて喋る。

「＊＊＊＊さまと目を合わせるな・・・」

「心を読まれてしまう・・・・・」

「まあ、恐ろしい。」

「呪われた・・・・」

「可哀相なお嬢様・・・・」

聞きたくない。

こんなこと聞きたくない。

耳を押さえて回廊を駆け抜ける。

すると執事がすっと寄ってきて囁いた。

「公爵がお呼びです。」

父上には会いたくない。

「い・・・・・や」

「お部屋でお待ちです。」

淡々と話すと私の前に立って歩き始める。

逆らうわけにはいかない。

父上は怖い。

「参りました、父上。」

「ああ、＊＊＊＊。

今度＊＊＊＊＊＊公爵と晩餐会をすることになってね。

お前にも参加してもらおうと思ったのだ。」

父上も私の目を見ない。

そして残酷な一言。

「しっかりと目を合わせてお話しするのだぞ。」

あたしはどうせ父上の政治の便利な道具。

そしてそれ以外は呪われたお嬢様。

たくさんの声があたしに襲い掛かる。

「目を合わせるな」

「心を読まれないように」

「恐ろしい子」

「呪われたお嬢様」

「化け物」

「魔女だ」

「ああ、なんてことだ」

「生まれて来なければよかったのに。」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「いやぁ――!!!!!!!!!!」

自分の叫び声で目が覚めた。

夢、か。

あれは何なのだろう。

見たこともない光景だったのに、あたしはあの城もあの人たちもはっきり覚えてる。

ほら、実際あの家が「城」だってことも。

あたしはどうしてアリスになりたいと思ったんだろう。

どうしてこんな夢見たんだろう。

涙を拭って眠りにつく前に一瞬目に浮かんだのは

あの儚げな一人の少女だった。

あたしの過去（後書き）

新たな小説をアップしちゃいました！！！
そちらもよろしければ読んでください♪♪

天才発明家（自称）の家

変な家。

それが私の感想だった。

この国の建物はみんなメルヘンチックなのに・・・・

何をどう間違えればこんなへんちくりんな鉄の塊みたいな家を造れるんだい、バカイル君！！！

「だから俺はカイルだってばぁ～。」

「勝手に人の心読むんじゃない、変態。」

「変態じゃないもん。僕は天才発明家だもん。この家だって未来型の素晴らしい発明品なんだもん。」

「その話し方やめてもらえますか、バカイル。」

「・・・。」

「あ、カイルがいじけたわぁ☆」

「ホントお前は楽しいなぁ☆」

はい、ただいまバカイルことチェシャ猫君のお宅にお邪魔しています！！

メンバーはシルヴァ、ココット、アベル、私、そして主であるカイル。

上の会話だけ見てると誰が主なんだかわかりませんね（笑

自称天才発明家のカイルはよれよれの白衣、ぼさぼさの頭という超さえない格好で登場した。顔が綺麗なだけにもったいない、と私は思ってしまうのだが。本人に言わせると

「外見にこだわっていたのでは良い発明は生まれない！！」

らしい。つまり面倒だってこと。

「違うもん！！！」

あと、こいつは人の心が読めるという能力がある。知らなかったけど、女王様にもこの能力はあったらしい・・・・。ただカイルみたいに馬鹿じゃないから乱用しないだけ。

「あ～あ、カイルさんざんだな☆どんまいどんまい☆」

「はぁ。。。じゃあ、みんな入って。」

「「「「お邪魔しまぁす。」」」」」

重い鉄の扉を開くと・・・・・

「嘘！！！！！」

「へっへっへ～俺のこと見直しただろう！！」

そこにはありえない空間が広がっていた。

外から見ると大体高さ3メートルくらいの小さな家なのに、
なのに！！！

そこはまるで南国のよう。
上にはなぜか青い空が広がり、（今日は曇り。）
なぜかやしの木があり。
なぜか熱帯のオウムがいて。
そして天井は見えない。

一応部屋になっていて、ドアなんかはある。真ん中にはソファーとテーブルがあってなかなかお洒落。

「みんな座って座って！」

「ここすごい・・・。」

「ふっふっふ。天才発明家、カイル様が作り出した魔法の世界さっ！」

「何かっこつけてるんですか。半分はココットの魔法を借りたくせに。」

「うっ・・・」

「ココットの？！」

「ええ☆どうしてもっていうから手伝ってあげたのよ☆うちの掃除を一週間してもらう代わりにね。」

ココットなぜか主婦っぽいんですけど。

「みんなはもしかしてここよく来てるの？」

「当たり前じゃないか！！俺たち幼馴染だもんなぁ、カイルっ！」

「おうアベルはわかってくれるなぁ！！」

なんかこの人たちいきなりハイタッチしちゃってるんですけど。

このテンション何とかしてください。

「お茶でも飲むかぁ？」

「飲む飲む！！！！」

台所にでも行くのかと思ったら、カイルは手をパンパンと二回叩いた。

「今の・・・・何？」

「カイルのおもちゃですよ。」

「おもちゃ・・・・・？？」

怪訝な顔をしていると、へんなロボットがお盆を持ってやってきた。

「紹介する。“俺が作った”ロボットの、ろぼ太郎だ！！」
「俺が作ったって強調しなくていいから。大体ろぼ太郎って・・・・」
「ネーミングセンス悪いわよねぇ☆アベルがつけたの。」
「可愛いだろう！！わかりやすいし。それが大切なんだ！！」
アベルとカイルは同類だった。悲しい事実。
するとろぼ太郎がにわかに口を開き、言った。
「ドウカオイデクダサリ、アリガトウゴザマシタ。
サッサトチャデモノミヤガレ！！！」

「「「「「・・・・。」」」」」

「ぷ、プログラムの設定を間違えたみたいだな、あは、あはは。」
「相手が僕らでよかったですね。」
「本当よ。双子だったらろぼ太郎壊されちゃうわよ？」
「ハンプティーなら怒り出してもう卵くれなくなるだろうな。」
すみません。知らない人物名が頻発してるんですけど。

「すまん、本当にすまん。
住民のことはアリスもそのうちわかるよ。」
「だから人の心読むのやめようね。」
「いやぁ、つい習慣で。」
「しかも私以外の人には反応してないしね。」
「アベルの心はわかるけど、シルヴァもココットもわかんねえんだよな。何考えてんだか。」
つまり私とアベルは単純なんだ。わかりやすいんだ。
悲しい。
「バカイルなんかに心読まれたくないですからね。」
「アリスはいいのよ、そのままで☆」
談笑、じゃれあいいつまでも続く。

謎だらけ

「めぐ！」

朝学校に行くとクラスの前で呼び止められた。
昨日のあの子と知らない別の子が一人。
その初めて見るほうが口を開いた。

「今日M&S来るよね??」

「M&S・・・・・??」

ぶっちゃけそんな名前初耳なんですけど。

「やだめぐったらとぼけちゃって。今日活動日じゃん?来るよね??」

「う・・・うん。」

とりあえず行っておいたほうがいいだろう。何か関係ありそうだし。

「じゃ放課後に音楽練習室で!!」

「りょうかーい。」

音楽練習室ってことは音楽系の団体だよね??
M&Sって何の略称だ??
まさか聞くわけにいかないし。

まじでどうしよう。。。。

「めぐ・・・・」

この澄んだ声はあの子のもの。

「何？」

「のど痛いんだったら無理しないでね？」

「あ、ありがとう・・・」

のどってことは・・・歌ですか？

何のジャンルだろう。ポップスかな。

「せいら～早く来ないと授業に遅れちゃうよ～」

「あ、うん！！じゃね、めぐ」

あの子せいらっていうんだ。綺麗な名前。

一つだけ謎が解けた。

それにしても。

わからないことが多すぎる。

何でアリスの記憶に入ってなかったんだろう。

何で忘れちゃったんだアリス。

そんなに嫌だったのかな。

ま、いっか。

一時間目の用意しなきゃ。

私はまだこのことの重要性をわかっていなかった。

M&S

・M&Sのメンバー

木戸星良（きどせいら）：M&Sでヴァイオリン担当。最初に私に声をかけてくれたあの清純な感じの雰囲気の子。

石川沙織（いしかわさおり）：M&Sでチェロ担当。こちらはまだ会っていない。

竹田円香（たけだまどか）：M&Sでピアノ担当。グループのリーダーで、今朝星良と一緒にいた子。

そして私、山崎恵美ボーカル。

・M&Sとは

自分たちで作詞・作曲をするバンドに近い有志。癒し系な曲を得意とする。

二ヶ月に一回開かれる校内の音楽系有志共同コンサートに参加している。

名前の由来はみんなのファーストネーム。

・今度のコンサートは7月18日。ちなみに今日は7月2日。

つまりあたしはけっこうやばいってこと。

曲目

・For ever

・Tear

・それだけが伝えたくて

作詞は主にあたしっていうか山崎恵美と、木戸星良が、作曲はあとの二人が主にやってたみたい。

あ～疲れた。一日人の心覗きまくって情報集めるの大変だった。

そして今活動教室に向かいながら集めたことを整理してみたのが上。

げっ。緊張してきた。何でだろ。

教室からは調弦をしている音が聞こえてくる。

ドアをガラガラと開けて入る。

調弦の音がぴたっと止んで、星良がにこっと微笑んで振り向いた。

三つ編みがふっと揺れて、濃い睫に縁取られた瞳が柔らかい光をたたえている。

ああ、百万ドルの笑顔。

その脇で机に必死で向かっている少女は今朝会った快活な感じの子・・・円香。

「はろ～」

「あっ、めぐ！お～っす。」

どうも宿題をやっていたみたいだ。

ポニーテールでスカートの短い彼女は、茶色の瞳を知的な光で煌かせている。

「あれ、沙織は？」

「まだだよ～、いつも通り。」

あ、いつも遅いんだ。

・・・と、廊下が急に騒がしくなったかと思うとドアがガラガラと開いて、大きな袋を抱えた子が短い髪を振り乱しながら飛び込んできた。

「おっ、遅れたぁ～！！！！」

これが沙織か。短髪で割合がっしりした体つきの彼女はうっかりすると男の子みたいだ。密かにファンクラブもあるとかないとか・・・・

「よっ沙織。遅れた理由を述べよ。」

「アイス食ってた♪」

「「「おい！！！」」」

「てへ☆」

いいキャラだ。うん。絶対に憎めない。

「・・・じゃ始めよっか。」

「何やる？」

「『それだけ』やろうよ。あれむずいし。」

「良いよ～」

決まると同時に位置に着き、沈黙で一瞬空気が張り詰める。

そしてその沈黙を切り裂くように星良と沙織の弦が歌い、あたしもすっと息を吸って歌い始める。

「最近なんか悩んだ顔してるね

辛いこと抱え込んでるみたい

そんな君に何にもしてあげられない僕は弱虫

口を開くのさえためらわれて

不器用で口下手な僕は君に何にも言ってあげられないけど

僕は君の隣を歩こう

それだけが伝えたくって僕は歌を歌う

重い鍵のかかった君の心に届くように祈りながら

君のこと何にもわかっちゃいないけど

君は大切な人
それだけが伝えたくって僕は君の隣を歩く
永遠の時の流れに今という時間を見つけて
Ｒｕ，ｒｕ－
Ｒｕ，ｒｕ－
Ｏｈ－
Ｈｕｍ・・・・・・」

一気に歌った。
初見だったけど、前から知ってたみたいに歌が唇を流れ出た。
最高の気分。
「あ～４７小節のとこまた間違えたぁ。暗譜無理～」
「沙織～そんな弱気なこと言っちゃ駄目だよ～」
「ちょっとくらい間違えても大丈夫だから、ね？」
「今日めぐ調子良かったねぇ～」

「ホント。いつも途中で一回は『間違えた！！』って言うんだもん。」

「あ、ごめ～ん！でも今日は大丈夫だったよね？」

「うん、その調子だよ！」

アリスって本当にダサいキャラだな。

あたしは気づかなかった。

ただ一人口をつぐんでいる彼女に。

じっとうつむいてた星良に。

カイルの家・・・2

「アリスは明日は誰の家に行くんだい？」

「ハンプティーの家がまともでいいと思っていたんですけどね。あまりにも君のように
非常識な人に会っているとアリスが疲れますから。」

「ひどいや、シルヴァ。僕のことが好きで君がSだからってそんな
言い方しなくたっていいじゃないか。」

「やめな、カイル。きもいぞお前。」

「（泣）」

「そいえば、何で私次から次へと色んな人のところを訪問するの？」

「それがアリスの仕事だからよ。」

「へ？」

「ほら、この国の人にはみんな役割があるでしょ？アリスはとりあ
えず本当の役割が見つかるまでは『アリス』としての役割を果たさ
なきゃいけないの。

アリスの仕事は住民全員に会って、楽しく過ごすこと。」

「ふ～ん。何か仕事じゃないみたい。って言っても、私ココットと
かアベルとかが仕事してるとこ見たことないんだけど。」

「失礼ねっ。私はこれでもちゃんと仕事してるのよ。ただ、薬剤師は一人でこもって仕事するから目につかないだけよ。」

「えっ、ココットって薬剤師だったの?!」

「知らなかったの?」

知らなかったのって・・・・誰もそんなこと教えてくれなかったじゃないか!!!!

「怒るな、アリス。心の叫びは俺がちゃんと聞いてやる。」

「余計なお世話よっ」

「にゃん。」

すぐにしゅんとなっちゃうし。塩を振られたほうれん草みたい。

「アリス~俺だってちゃんと仕事してるぞ?」

「うっそだ~!!アベルが帽子売ってるところなんて見たことないよ?」

「ば~か。俺の仕事は医者だよ、医者。ココットが作った薬を処方したりするんだよ。」

「ええ~!!!!アベルが医者???帽子屋じゃなかったの?」

「帽子屋―マッドハッターっていう名前は、暗に狂人を指してるん

だ。俺の祖先はすごく進んだ医術を患者に施してたんだけど、それは宗教的な考え方から見れば、
狂ってるってみなされたんだよ。そゆことで、俺の役割は『帽子屋』。」

「三月兎も似たようなもんよ。三月になると兎ってちょっと興奮気味になるのね。そのことから三月兎って言う名前は狂人を指したりしたのよ。まあ、医術も薬作りも当時は異質なものだったから、狂ってると言われて排除されたわけ。私の祖先はこんな耳がついてたしね。」

「あ・・・・・そうなんだ・・・・・」

ぜんぜん知らなかった。
彼らの名前にそんな深い訳があったなんて。

異質なものを排除して安定を保とうとする社会。
口先ばかりの「個性を大切に」。

そこから排除された人々が織り成す不思議な桃源郷・・・・・それが三日月の国。

そしてまた私も・・・異質な人で。

「何か・・・・ごめんね・・・」

「アリス何を謝ってるの？私たちはただ事実を語っただけよ？別にあなたに何かされたわけじゃないし。」

「それに俺らは生まれてからずっとこの国で生きてるんだから排斥

なんてされたことないしな。」

「うん・・・・・」

「ほらほらそろそろ昼飯にしようぜ！！！カイル様特製ピザを作ってやろう！！」

「あはは、何それ！！」

「お腹すいたぁ！！」

三日月の照らす三日月の国。

私の役割は何なのだろう。

瓜二つ☆

「気をつけて帰れよ～」
どこか間の抜けたカイルの声を聞きながら私たちが帰途についたのはなんと夜の
９：００過ぎだった。

「明日はハンプティー・ダンプティーという人のところに行きましょう。」

「ハンプティーって、マザーグースに出てる卵のこと？」

「マザーグースって何だか知らねえけど、あいつはれっきとした人間だぜ？最近
メタボ気味だけどな。」

「まあ卵に見えなくもないわね。」

「彼は農場をやっているんですよ。いつも美味しい卵や肉や野菜を届けてくれま
すよ。この国の食べ物はほとんどハンプティーが作ったものです。」

へーえ。この国で唯一第一次産業をやってる人か。

っていうかマザーグース知らないのに、何でメタボを知ってるんだろう…。
ふと疑問に思ったり。

まあ、そんなことどうでもいっか。

今日も疲れた。早く部屋に帰って寝よ。

みんなにおやすみを言って部屋に戻り、ベッドに倒れこむ。

あーお風呂入るの面倒くさい……

「あー！！アリスが服着たままベッドで死んでるよー！！」

「うわだらしないねえー。靴も履きっぱなしだよー」

「部屋も来たばっかりなのにだらしないし」

「アリスの清純なイメージがどんどん崩れてくねー」

「「あはは～☆」」

誰だよ。

人の部屋で好きなこと言ってる侵入者約二名！！！！

むごっと起きて周りを見回す。

おかしいな、誰もいない。

ベッドから這い出てふと上を見ると・・・

いた。

ちっこいのが2人。

瓜二つ。

どちらも綺麗な金髪で青い眼の男の子。

この国では珍しい（？）普通の顔。

9歳くらいかな。日焼けしてて、やんちゃ盛りの健康的な男の子って感じ。

つなぎのズボンをはいて、黄色のTシャツを合わせている。

黙っていればきっと可愛いのに。

こんな弟が欲しいとか思えたかもなのに・・・・！！！！

「あんたたち人の部屋に勝手に入ってるんじゃないわよ。」

「あ、ぼけアリスが気付いたよ～」

「本当だー。窓開けっ放しで外出するぼけアリスが気づいた～」

「へ、うそ。」

慌てて窓の方を見ると、全開。

ああ・・・なんで私は一回で懲りないんだろう・・・。

「これじゃせっかくのココットの魔法もぜんぜん利かないよね～」

「まあ、おかげで入ってこれたけど。」

「で、あんたたち自己紹介はないわけ。」

「あ、そうだ。僕がトウィードゥル・ダムで、」

「僕がトウィードゥル・ディーだよ。」

「「間違えないでちゃんと覚えてね、アリス☆」」

感動するまでの見事なハモり。

「すいません。見分けるにはどうしたらいいんでしょうか。」

「そういうことは本当は自分で発見してほしいんだけど、まあアリスには特別に教えちゃおう！！」

「僕ダムには右目の上にほくろが一つ。」

「僕ディーには左目の上にほくろが一つ。」

「「ほ～ら簡単でしょ？」」

言われてじっくり彼らの眼の上辺りをを一分間観察してわかる大きさのほくろって

「見分けんの超難しいじゃないか！！」

「え～でも間違える人なんていないよ～」

「バカイルくらいだよ～」

「あれと一緒はやだな。」

「「じゃあアリスもちゃんと覚えてね☆」」

「はい。」

って。

何で私は年下の侵入者約二名に敬語使ってんのさ！！！！

「っていうか何でそもそも人の部屋に侵入したわけ？」

「「アリスと話したかったから！！！」」

反則だ。

大きな瞳をきらきらさせてにこっと笑って可愛いこと言っちゃって。

憎めないじゃないか！！！！！

絶対に反則だぁぁぁぁぁぁ！！！！！

「アリス、騒がしいけどどうしたんですか??」

「やべ、シルヴァが気づいちゃった。」

「じゃ、アリスと話せたし、見つかんないうちに帰ろっか。」

「楽しかったよ、アリス!!!」

「明日も来るからね、アリス!!」

「「窓開けておいてね!!!おやすみ〜!!!!!」」

「えっ、ちょちょまっ!!!!!」

弾丸のように言うことだけいって二人の少年は窓から風のように消えた。

そう。

消えた。

窓から。

あんなに小さいのにあの子たちも魔法を使うのか・・・!!!!!

「アリス??」

「あ、ごめんシルヴァ、変な夢見ただけだよ〜」

「そうですか、おやすみなさい。」

「おやすみ〜」

何で私はあいつらのことかばってるんだ!!!

それにしても、結局なんだったんだろう。。。

やっぱりこの国は謎だらけです。

瓜二つ☆（後書き）

試験中のため更新が滞っております（汗

ご容赦くださいっ・・・

あの世界

あたしはまたあの場所にいた。

気付くとあたしは淡いブルーの綺麗なドレスを着て、召し使いにメイクをしてもらっていた。

彼女はあたしと目が合うと、慌ててそらした。

あたしが怪獣かなんかだと思ってるみたい。

今日は何とか伯爵がいらっしゃる日。

心を覗くのがあたしのお役目。

すごく気が思い。

伯爵の心は大して面白くなかった。

娘はどうしているだろうとか。

美味しい食べ物は出るだろうかとか。

食事中は、このワインが最高だとか。

あのメイド可愛いとか。

そんな感じ。

伯爵が帰ったあと、それら全てをお父様に伝えた。

彼はみるみる真っ赤になり、怒号を発した。

どうやらあたしがちゃんと見なかったからいけないと怒っているらしい。

ずいぶん勝手な言い草だ。

伯爵がのんきなこと考えてるからいけないのに。

と、突然頬が熱くなった。

殴られた。

「来るんだ。」

あたしは怯えた子羊のように一二歩後退った。

「さあ、早く。来るんだ。」

彼はあたしの腕を乱暴に掴むと、自分の部屋まで引きずっていった。

あたしは何が起こるかなぜか知っていた。

彼の目がギラギラと怪しげな光を放っている。

じりじりとあたしに近づいて来る。

手に焼き鏝を持って。

そう。

彼の趣味はあたしをこうやってボロボロにすること。

こんなやつあたしの父親じゃない。

彼こそ化け物だ。

にやりと薄汚い笑いを浮かべ、あたしのドレスをめくりあげる。

金縛りにあったように動けないあたしは恐怖におののくことしか出来ない。

背中に焼けつくような激痛を感じ、あたしは叫んだ・・・・・・・

そしてあたしは気付くと布団に座っていた。

全身汗をびっしょりかいていた。

見たこともない景色なのに夢であたしは知っていて。

夢と笑い飛ばすにはリアリティーがありすぎて。

つじつまが合うような、合わないような。

何か・・・気持ち悪い。

本当に何なのだろう・・・・・・

答えの見えない問いだけが所在無さげにさまよっていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1843f/

三日月の国のアリス

2010年10月28日08時54分発行